

ハーモニー

Harmony

第75号 2017年12月20日発行
日本養護教諭教育学会

Japanese Association of Yogo Teacher Education

日本養護教諭教育学会

事務局：〒448-8542

刈谷市井ヶ谷町広沢1

愛知教育大学養護教育講座
後藤研究室

TEL&FAX 0566-26-2491

振替口座：00880-8-86414

<http://www.yogokyoyu-kyoiku-gakkai.jp>

目次

第25回学術集会（金沢）のご報告とお礼……………1	2017年度総会報告（速報）……………6
第25回学術集会を終えて……………2	2018年度研究助成金研究ならびに
第25回学術集会プレングレス報告……………3	第25回学術集会「投稿奨励研究」選定報告……………7
学会参加者の声……………3	学会誌第22巻第1号投稿原稿の募集……………8
「私の実践と研究」リレー・レポート……………4	事務局より……………8
「災害について考える」⑥……………5	編集後記……………8
トピックス……………6	

第25回学術集会（金沢）の ご報告とお礼

学会長 河田 史宝（金沢大学人間社会研究域）

2017年10月7日から8日に開催しました日本養護教諭教育学会第25回学術集会には、250名余りの皆様にご参加いただきました。本当にありがとうございました。

本学術集会のメインテーマは、「養護教諭のキャリア形成を考える—学び続ける教員像の実現に向けて—」といたしました。大量退職、大量採用の時期における先輩教員から若手教員への伝承の減少もありますが、高度専門職業人としての「学びの専門家」にも迫りたいと考えました。教職生活の生涯にわたり、自律的に学び続ける養護教諭像の実現に向けて、円滑に連携・協働していくための方策を一緒に考え、深め、今後の養護教諭のキャリア形成につながる学術集会にしたいと企画しました。

学会開催前に理事会主催のプレングレスでは、「教育改革の中で、改めて養護教諭のこれからを考える」をテーマにグループによる協議が行われました。その後は、メインテーマに沿い、学会長基調講演、特別講演、シンポジウム、養護実践基準中間報告と進めました。シンポジウムでは、座長を後藤ひとみ理事長に担当いただき、平井美幸氏（養成）、島崎慶子氏（研修）、竹内雅子氏（現職）のご提言をもとに、参加者との協議も活発に行われました。特別講演は、山本敏行氏（ChatWork株式会社代表取締役社長）のご講演から、「HaveではなくBeの欲求へ」「たらいの法則」「組織を超えた勉強会」

など、今後の実践に活用できそうな内容を伺うことができました。参加された皆様からも「学会長基調講演からシンポジウムの流れの中で、養護教諭のキャリア形成について、じっくり考える機会となりました」との声もいただき、概ねメインテーマの趣旨に沿い、考えを深めることができたのではないかと思います。

一般演題は口演22題、ポスター発表22題と多くの方にご発表をいただきました。各会場では、座長の皆様によりスムーズに進行されるとともに、参加者の皆様のご協力により活発な協議がされました。感謝申し上げます。

4つのワークショップには、最後まで多くの皆様にご参加いただき、いずれの部屋からも和やかな学びの中にも熱気を感じることができました。

今回の学術集会は北陸で初めての開催でした。そのため、福井県、石川県、富山県、新潟県の現職養護教諭の皆様にご協力としてご協力いただきました。作業停電による会場変更や前日の視聴覚機器の故障もありましたが、実行委員の皆様のご協力を得て無事終えることができたことに感謝いたします。「地域に新しいかぜ」をすこし届けることができた気がします。

会場は、金沢駅からも遠く参加者の皆様には、多くのご不便をおかけしたと思います。それにも関わらず笑顔で参加してくださいましたことに感謝申し上げます。最後になりましたが、メインテーマ設定から最後まで、後藤理事長や理事の皆様にご支えていただきました。学会開催に際して関わってくださった全ての皆様方にお礼申し上げますとともに、今後の学会のさらなる発展を祈念申し上げます。

第25回学術集会を終えて

実行委員長 竹俣 由美子 (金沢市立小坂小学校)

2015年に北陸新幹線が開業し、金沢は東京から2時間半の時間距離となりました。それに伴い、国内外から多くの観光客が訪れ、賑わいを見せております。週末や連休は一層です。10月のすがすがしいシーズン3連休に開催されましたこの学術集会では、ホテルがいっぱい宿泊予約がとれないというお声を聞きました。多くの方々がこの会に参加するためにご苦勞をされたこと申し訳なく思っております。そしてそのような中ご参加いただいた皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

金沢は東山の茶屋街、兼六園だけでなく、町を少しはずれたところにも、古民家を改造したカフェやレストラン、美しい庭園を持ったおうちなど皆様に訪れていただきたい所がたくさんあります。回るお時間はありだったでしょうか。

今回の学術集会の実行委員は、ほとんどは現職養護教諭で、学校現場で日々奮闘している者ばかりでした。学会参加が初めてというメンバーや若いメンバーもたくさんでした。研究などは遠い世界のこと、大学の先生がなさることといったイメージを持っておりました。そういった私たちが学会、研究に触れる機会をいただきましたことは何より得がたい体験でありました。若いメンバーにもよい経験となり、新たなエネルギーになりました。戸惑い、アタフタすることもありますが、その都度話し合い進めることができました。実行委員、学生ボランティアに感謝です。

学術集会は、私たち金沢の養護教諭にとって刺激的な時間でした。自分達の日々の仕事を見なおし、どのような意味があるのかを再考することができました。しっかり考えなくてはと、気持ちを新たにいたしました。このような機会を下さいました学会の理事の皆様にも感謝致します。

<学術集会アンケート結果>

学術集会の際にいただきました貴重なご意見をまとめましたので、ご報告させていただきます。

【回答数41】

1. 本学会をどのように知ったか (複数回答)

知人の紹介 (26.8%)、機関紙「ハーモニー」(24.4%)、学会のホームページ (19.5%)、いつも参加している (19.5%)、日本養護教諭教育学会誌 (17.1

%)

2. 興味を持った内容 (複数回答)

シンポジウム (56.1%)、特別講演 (41.5%)、一般演題口演 (41.5%) 学会長基調講演 (34.1%)、一般演題ポスター (22.0%)

3. 本学術集会の運営について

<会の流れ>

- ・学会長基調講演からシンポジウムの流れの中で、養護教諭のキャリア形成についてじっくり考える機会となりました。
- ・養護実践基準中間発表報告はとてもわかりやすく、納得しました。
- ・養護教諭養成指標についての協議が興味深かった。
- ・さまざまな養護教諭が身につけるべきことを学ぶことができました。
- ・養護の本質って難しいですね。
- ・一般演題発表の発表10分、討議9分は長すぎです。

<会場>

- ・会場が広くてわかりづらかった。
- ・会場の入り口、外に看板があるとよかった。
- ・バス停を降りてからの掲示がなく迷った。
- ・一方所にまとまっておりよかった。
- ・学習環境が落ち着いていた。
- ・わかりやすく掲示されていてよかった。

<アクセス>

- ・会場までのバス時刻が会の開会に合っていなかった。
- ・直通バスがもっとあったらよかった。
- ・バスがとても混んでいて、本数が少なくて大変だった。

<その他>

- ・3連休だったことと、観光地ということで、ホテルがとれなかった (とれたがとても高い)。京都や金沢など、連休の時期は大変。

4. 次年度の学会に希望すること、取り上げてほしいテーマなど

- ・実践研究の進め方について
- ・プレコングレンスに参加しましたが、様々な意見がテーマに沿って出され、話が深まった。案内では理事役員中心のもののように思われ、わかりやすく記載されるとよい。
- ・異分野の話が聞きたい。今年のCHATWORKSの山本さんのお話は興味深かった。

第25回学術集会プレコンgress報告

小林 央美 (学会活動担当理事)

2017年10月7日(土)の9:30~11:30、金沢大学自然科学館1F大講義室Bにおいて、『教育改革の中で、改めて養護教諭のこれからを考える』をテーマにプレコンgressを開催した。参加者は36名で、現職養護教諭が11名、養成関係者が25名であった。

プレコンgressの内容は、以下の1~4の通りであった。

1. プレコンgressの趣旨及び教育改革に関する資料説明(三木学会活動担当常任理事)
2. グループワークによる討議(加藤学会活動担当理事)
3. 各グループの協議と発表
4. アンケート記入

1の教育改革に関する資料説明では、本プレコンgressにおける「教育改革」をどう捉えるかの共通理解を図った。平成27年12月21日に出された戦後最大の教育改革と言われる中央教育審議会の3答申、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」・「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」・「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域連携・協働について」や、養護教諭の免許法関連資料、平成29年3月に文部科学省から出された「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援(一部抜粋)」を活用してポイントを説明した。

2のグループワークでは、現職養護教諭、養成関係者など職種毎に6人程度の6班に分かれて、前述の共通理解のもと「養護教諭のこれから」を考える上で重要と思われる視点をグループ毎に掲げて討議を行った。

3の各グループの発表の一部を紹介する。「チーム学校として機能するためのコーディネーターとしての養護教諭のあり方は、問題のある児童生徒に必要な支援を行うためであることはもちろんだが、それ以前の未然防止として、健康観察で気になることや記録していることなどを関係者に情報発信(アピール)していく力が大切である」「養護教諭の専門性を担保するために養成機関で教職性の学びをきちんと行うことが重要。若くても学校の中で他の教員に養護教諭の専門性を理解してもらえるような働きかけをするためにも、教員としての基本である教職性を養成の中で強化したい」「養護教諭の専門性は、子供の生命・健康・幸せに結びつく個別と集団への働きかけである。子供の実

態や社会状況までも分析して、学校の中で教育として養護として展開することである」「健康教育では、専門性を生かし、どう教育の中に位置づけていくか、養護教諭自身が常に教職性を意識することが重要」「協働には、状況判断力・組織形成力・専門的知識・コミュニケーション力が必要である」等があげられた。

4のアンケートについては24名から回答を得た。プレコンで考えたことを自由に記述してもらったところ、「同じ養護教諭でも校種や経験年数の違いを踏まえて問題点を分かち合い自分たちなりの解決策を見いだせたのは、参加した甲斐があり、元気をもらった」「養護教諭のこれからを考えるいい機会となった。様々な答申や法律を意識していこうと思った」「養成教育をしている者として方向性を認識できた」「現職の先生の生きた言葉が響いた」「討論の時間が短く感じられるような充実した時間だった」「専門性を問い直す中でそれぞれの先生方のご意見を聞かせて頂ける機会は大きな起爆剤になると実感した」「大きく変わろうとする教育改革の中で揺るぎない養護のコアを見極めていきたい」「最初の趣旨説明と資料のポイントの説明が役にたった。有意義な時間だった」等があげられた。

今後のプレコンgressで扱ってほしいテーマでは、「チーム学校としての養護教諭の役割」という意見が出された。また、このテーマを継続してほしいとの意見もあった。

学会参加者の声

「第25回学術集会に参加して」

石山 志央子 (秋田市立高清水小学校)

養護教諭2年目に当たる今年度の学術集会が金沢大学で行われると聞き、「金沢に行きたい!着物で金沢の街を歩きたい!」という大学時代の仲間が集まり参加させていただきました。と言うと、少し遊び半分のように聞こえるかもしれませんが、大学3年生の時に参加した千葉大学での学術集会とはまた違った気持ち、つまり、養護教諭目線での思いがあり金沢に向かいました。

今回の学術集会のテーマは「養護教諭のキャリア形成を考えるー学び続ける教員像の実現にむけてー」であり、パネリストの先生方やフロアの先生方の様々な実践・考え・思いなどを聞くことができました。来室対応をはじめとし、様々な実践の振り返りが大切であ

ると改めて感じました。振り返ることで、自分の思考がわかり、何を課題と感じているのか、子どもにどのような力を身に付けさせたいのかが見えてくるのではないかと考えます。そして、今自分には何の力（知識や技術など）が足りていないのかに気づき、自分自身の学びに繋がるのだと思いました。

学生時代長い時間をかけて考えた「養護」を胸に養護教諭として働き出しましたが、立ち止まって考える時間を作れずにあっという間に1年半が過ぎました。学生時代の仲間と一緒にまたこうして養護について考えられる学会集會に参加でき、本当に良かったと思っています。置かれた環境はみな違いますが、今回の多くの学びと、観光でたくさん撮った写真を持ち帰り、みんなで養護教諭として成長していきたいと思います。

「学会発表を終えて」

八木 智子（大阪教育大学大学院 教育学研究科
養護教育専攻）

大阪から特急で約2時間半、観光で賑わっている金沢に到着しました。初めての学会参加で初めての学会発表。得難い経験ができると嬉しい反面、正直大きな不安もありました。私は、養護教諭として22年間現場に勤め、さまざまな子ども達との出会いから再度学びたいという気持ちが強くなり、大学院で学ぶことを決めました。そして大学院生活2年目、このような意義ある機会が与えられ、自分の研究成果を発表することになりました。当日は、「上手く話せるかな… どんな質問が出るのだろうか…」と不安と緊張で顔もこわばっていました。でも、指導教員の先生がリラックスできるようにと笑顔で肩をたたいて声をかけてくださり… 本当にありがたく、心強かったです。今回、日本養護教諭教育学会での発表を経験して本当によかったと強く感じています。当日までの準備は大変でしたが、研究全体を再度見つめ直すことができましたし、緊張しながら発表したことも今後のさまざまな場面に活かせることと思います。なにより、自分の研究をみなさんが聴いてくださり、貴重なご意見をいただけたこと。この経験を今後の研究、今後の養護教諭人生にしっかりと役立てていきたいと思っています。最後になりましたが、日頃のご指導及び学会発表の機会を与えてくださった指導教員の先生、日本養護教諭教育学会の方々に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

「学会集會を終えて」

松生 尚子（石川県立金沢辰巳丘高等学校）

第25回学会集會に実行委員として参加させていただきました。この学会集會への参加が、私の初めての学会参加となりました。

実行委員の先生方の「学会集會参加者にたくさんのものを持って帰ってもらいたい」という熱い想いと参加者の方の「多くのことを吸収したい」という学ぶ姿勢を見て、養護教諭として下を向いていた私は、今、また前を向いて生徒と向き合っていくパワーをいただきました。

「実行委員をやってみませんか」と声をかけていただいた時、参加したことがない「学会」や「学会集會」という言葉に不安を感じ、また、初めての実行委員では、話し合われている内容がわからず、恥ずかしさと焦りを感じていました。

当日までの準備の過程は、実行委員のほとんどが現職の養護教諭で、実行委員で集まることができる時間が限られた中、学会集會を成功させたいと、日々の職務と並行して準備を進める実行委員の先生方の姿、そして、準備の内容に「こんなことまで！」と驚くことばかりでした。

当日は、全国からたくさんの方に参加していただき、日々の実践を研究発表された発表者の方、積極的に意見交換をする参加者の方、前向きに学んでいる方々と出会い、養護教諭という職種の素晴らしさを改めて感じ、私も頑張りたい！と思いました。

北陸地方で初めて開催された学会集會に関わること、学会集會に参加していなければ出会えなかった方々との出会いに感謝し、これから前を向いて、目の前の生徒と関わっていききたいと思います。ありがとうございました！

「私の実践と研究」リレーレポート

「私の研究の樹～養護実践が根となり
養成教育が幹や枝葉になる～」

奥田 紀久子

（徳島大学大学院医歯薬学研究部学校保健学分野）

この度、自分自身の実践と研究について、改めて概観する機会をいただき感謝しています。

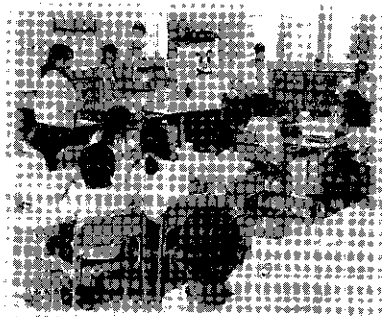
私の研究生活は、20年ほど前に養護教諭を辞めると

ほぼ同時に、縁あって養成教育に関わることになった時から始まりました。実は当時、それほど研究の必要性は感じておらず、立場的に研究しないといけないからスタートしたというのが正直なところでしたが、研究を始めて間もなく、もっと早くこの視座に立つべきだったことに気づかされました。もしかすると私は保健室に来る子供たちをひとりよがりな目で見ていたかも知れません。もっと別の見方があったし、別の関わり方があったかも知れません。子供の人生を変えるかも知れない養護教諭としての活動を、客観的に評価する研究的視点が乏しかったと思うからです。今の私の研究はその頃の子供たちに支えられており、研究することは彼らへの恩返しでもあると思って取り組んでいます。

現在、子供の主体的な健康観を育てる保健教育のあり方についての実践研究を進めています。平成23年度から科研費やかんぽ財団の助成金を受けて、徳島県内の小・中・高等学校で喫煙防止教育を実践し、その成果を継続的に分析する研究です。この研究は、当初学内の教員や医師会の先生方との協働で始めたものでしたが、今年度からは養護教諭を目指す学生がピアとして参加しています。学生の存在は小・中学生の自由な発言を引き出し、より深い学びや気づきにつながっていることを実感しています。そして、調査の分析からは、小学生も中学生も、たばこの学習をすることが、自分の健康は自分で守るという意識の強化につながっていることが明らかになってきました。

私は常々、研究は子供たちの将来の幸福のために貢献できるものであるべきだと考えてきました。できれば研究活動そのものを子供の生活に直結したいと考え、そこに同じような思いを持った学生の柔軟な発想や気づき加わることで、研究の樹が大きく広がっているように思います。

研究は科学的でなければなりません、その根底には子供たちの健康を願う温かな思いが常に必要だと思っています。



「災害について考える」⑥

「災害支援論の授業を通して考える」

大川 尚子（関西福祉科学大学）

本学は福祉系大学として、東日本大震災後の2011年9月より、学生が実際に災害支援活動したソーシャルワーカーから、災害時に「何ができるのか」、「何をすべきなのか」を学生が聴き取り、記録として残し（「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」）、その内容を整理した上で、報告会や出版物を通して発信する（「学生“語り部”プロジェクト」）を実施しています。そのプロジェクトのノウハウを生かし、健康科学科・福祉栄養学科・リハビリテーション学科・社会福祉学科・臨床心理学科に所属する教員がチームを構成し、養護教諭・管理栄養士・PT・OT・SW・臨床心理士が行う「災害支援」の方法論を教育することを主眼とした効果的かつ実践的なカリキュラムを策定し、「災害支援論」という授業を開講しています。

各専門職が災害支援において『何ができるのか』、『何をしなければならないのか』を、実際に災害現場で支援活動に従事した専門職へのインタビュー調査、被災地を訪問して現地でのフィールドワークを通して体験的に学ぶとともに、インタビューおよびフィールドワークで得た知見を概念化することで、それぞれの分野における災害支援の方法（理論）を体系化するなど、アクティブラーニングの手法で展開してきました。

現在は、今までに体系化した概念（理論）と先行研究を検証しつつ、大学所在地あるいは居住地などの実践的場面にあてはめ、自治体と共同したプロジェクトを立ち上げ、防災、災害時対応の現実的、実践的な方法（政策）を各専門職の立ち位置で立案するなど、PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）で実施しています。

その授業の中で、大震災の被害を肌で感じ、そこで支援活動を実施した養護教諭の生の声を聴き取った上で、グループ討議、教員によるスーパービジョン等を通して振り返りを行うことにより、参加学生は高いモチベーションを維持しながら活動を継続し、結果、災害支援における養護教諭の価値を体感するとともに、将来のキャリアとして養護教諭になりたいという思いが強くなっています。

授業の後、被災地の現状を伝え、少しでも東北に思いをよせてもらうことが大切だと考え、養護概説の授業で後輩に、オープンキャンパスで高校生に、養護教

論部会や衛生管理者研修会で、学生が「語り部」となって報告しています。

※以下に参加した学生の報告を紹介します。

<災害支援における支援者の役割（養護教諭）>

東日本大震災が発生した時、養護教諭はどのように動き、現在までどのように子どもたちを支えてきたのか。あの時、学校で被災した子どもも多く、また、学校は避難所となり混乱状態であったと多くの報告がされている。

養護教諭を目指すために、大学に入学して、養護概説の授業の中で東日本大震災の様子やそのときの学校の状況を学んだ私たちが、「東日本大震災が起こった時、養護教諭はどのような行動・対応をしていたのか?」「実際に被災地に行きインタビューをさせていただき、私たちにはわからない思い・気持ちをしっかり学びたい。」と考えた。

<事前学習・グループワーク>

養護教諭には、保健管理・保健教育・健康相談・保健室経営・保健組織活動の大きく5つの職務がある。まず東日本大震災が起ってから、過去・現在・未来を5つの役割に照らし合わせて、災害支援における支援者として、養護教諭なら何が出来るのかをまず自分たちで考えることにした。グループワークを行い、先生方から養護教諭は、震災で被災した子どもたちの心身状態を把握し、福祉・医療・心理などの専門職へ繋ぐコーディネーターとして、健康支援をすることが重要だということ学んだ。また、他の学科のグループワークの報告を通して、どの専門職も他職種の方たちと連携することが重要なことだと学ぶことができた。

<養護教諭として私たちにできること>

震災を経験した宮城県の小学校の養護教諭へのインタビューを通して、何も特別なことは必要でないということ強く感じた。家族を失ったり、家を失ったり、様々な子どもたちがいる中で、無責任な言葉ではなく、いつもと同じ調子で「おはよう」と挨拶したり、心身のことに気をかけながら声かけをしていくことで、安心感を与え、少しの体調の変化にも気づくことが大切であると学んだ。家庭や学級では、気を使って過ごしている子どもも、養護教諭の前ではがまんすることなく、素直に気持ちを打ち明けてくれたりする。その関係を大切にしながら子どもたちを支援することが重要であると実感した。私が養護教諭として勤務した時には、子どもたちにこの体験で見えてきたものを伝え、そ

こから生きることの大切さ、感謝の気持ちなどを学んでほしいと考える。

今回学んだことを伝えることが私たちに今できることだと考える。自然災害はいつ起こるかわからない。東日本大震災が起き、4年（当時）が経った今でもまだ復興は進んでいるように思えなかった。阪神淡路大震災や東日本大震災で得られた情報を次に起きる災害に活かし、「あの時こうすればよかった」と後悔しないためにも、少しでも多くの人たちに伝えていきたい。

トピックス

「教育職員免許法施行規則及び 免許状更新講習規則の一部を 改正する省令」の公布

平成29年11月17日に、みだしの省令（平成29年文部科学省令第41号）が公布されました。養護教諭の免許状授与に関する改正の要点は以下の通りです。

- ①教育職員免許法上の科目区分が大括り化されたことをふまえ、同法施行規則の科目区分が現行の8科目から5科目（1 養護に関する科目、2 教育の基礎的理解に関する科目、3 道徳、総合的な学習の時間等の内容及び生徒指導、教育相談等に関する科目、4 教育実践に関する科目、5 大学が独自に設定する科目）になりました。
- ②履修事項として「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解（1単位以上修得）」「総合的な学習の時間の内容」「チーム学校運営への対応」「学校と地域との連携」「学校安全への対応」「カリキュラム・マネジメント」などが加わり、大学の判断で養護実習に学校体験活動（2単位まで）を含むことができるほか、大学が独自に設定する科目の履修も規定されました。

2017年度総会報告（速報）

古賀 由紀子（総務担当常任理事）

2017年度総会は第25回学術集会（金沢大学 自然科学館本館レクチャーホール）において180名（委任状提出者121名を含む）の出席により、河田史宝学会長と澤村文香会員の議長のもとに開催されました。以下に審議・承認された議案の概略を報告します。

議案1. 2016年度事業報告、議案2. 2016年度決算・監査報告、議案3. 2017年度事業経過報告が承認されました。

議案4. 2017年度補正予算審議については、審議の前に別会計としていた編集委員会費を本会計に繰り入れて一本化することが理事長から説明され、原案通りに承認されました。

議案5. 2018年度事業計画では、会員から「養護実践基準」の作成と「養護教諭の専門領域に関する用語の解説集」の改定に関する質問があり、「養護実践基準」については理事会が中心になって慎重に検討すること、「養護教諭の専門領域に関する用語の解説集」については一版や二版を踏襲するとともに、たたき台をホームページやHPで会員に提示することなどが理事長より説明され承認されました。

議案6. 2018年度予算審議は承認されました。

議案7. 会則等の規定改正では会則第12条に「学術委員会」の追記及びそれに伴う同委員会の業務内容の実施細則への追記、投稿規定の一部改正が提案され承認されました。これらの改正は2017年10月8日より施行されます。

議案8. 研究助成金研究の選定では新規1件の研究に対し、承認されました。(詳細は、次項の選定報告をご覧ください)

議案9. 名誉会員の推薦について、理事会より堀内久美子会員と盛昭子会員の推薦があり承認されました。2017年10月8日より名誉会員となりました。

議案10. 第Ⅷ期理事選出選挙の結果が中下富子選挙管理委員長より報告されました。選挙結果は次の通りです。

- * 北海道・東北ブロック：小林央美（弘前大学）
- * 中部ブロック：河田史宝（金沢大学）、後藤ひとみ（愛知教育大学）
- * 関東ブロック：鈴木裕子（国士舘大学）、三木とみ子（女子栄養大学）
- * 近畿ブロック：大川尚子（関西福祉科学大学）
- * 中国・四国ブロック：上村弘子（岡山大学）
- * 九州ブロック：古賀由紀子（九州看護福祉大学）

以上8名の新理事が承認されました。

議案11. 第27回学術集会（2019年）の開催地については関東ブロックを予定していることが後藤理事長より報告されました。

総会終了後、第26回学術集会学会長の津島ひろ江会員より挨拶があり、2018年9月29日・30日に関西福祉大学（赤穂市）にて開催することが紹介されました。

2018年度研究助成金研究ならびに 第25回学術集会「投稿奨励研究」選定報告

鈴木 裕子（学術担当常任理事）

<2018年度研究助成金研究の選定報告>

本学会では、養護教諭教育（養護教諭の資質や力量の形成及び向上に寄与する活動）に関する研究の発展を目的として、会員の特色ある研究に対する助成制度を設けています。2018年度の研究助成金研究は、本年9月10日に申請を締め切り、理事会において内規に則り審議を行いました。その結果、次の1件を選定することとし、金沢での2017年度総会にてご承認をいただきました。

○研究代表者 野田智子会員（埼玉医科大学）「特別支援学校における養護教諭の専門性に関する研究」

今後、機関紙ホームページでの報告および学術集会でのご発表をいただき、助成期間終了後おおむね1年以内に学会誌への投稿をお願いしています。

今後この制度を活用して養護教諭教育の発展につながるご研究に取り組んでいただけますよう、会員の皆様の積極的なご応募を期待しております。

<第25回学術集会「投稿奨励研究」の選定報告>

こちらの制度は、養護教諭教育に関する研究の一層の発展を図ること、とくに現職養護教諭による研究を推進することを目的として、学術集会の一般発表の中から優れた研究を投稿奨励研究として選定し、学会誌への投稿を奨励するものです。

第25回学術集会（金沢）での一般演題座長および本学会理事からの推薦を受け、理事会において、今回は次の2件について選定し投稿奨励を行いました。

○研究代表者 酒井都仁子会員（千葉市立土気小学校）「他者からの評価がキャリア発達に及ぼす影響～『公開と批判』の経験から～」

○同 今優佳会員（千葉市立宮崎小学校）「養護教諭養成課程に在籍する学生の養護教諭志向に関する意識変容プロセス」

この2件は、特典として学会誌投稿の際に査読費用7,000円が免除されます。

今後も同様に投稿奨励を行ってまいります。次回第26回学術集会においても、養護教諭教育の発展につながるような養護教諭の視点による研究発表を期待しております。

お問い合わせは学術担当常任理事まで。

国士舘大学文学部 鈴木裕子

メールアドレス suzukiyu@kokushikan.ac.jp

学会誌第22巻第1号の投稿原稿の募集

山崎 隆恵 (編集委員)

本学会誌は創刊より第22巻を迎えることになり、年々会員の皆様からの投稿論文が増えてまいりました。誠にありがとうございます。養護教諭や養護教諭を目指す人が、互いに学び合い成長していく糧となる学会誌を目指しております。会員の皆様が課題意識を持って取り組まれた実践や研究を投稿していただくことに、編集委員会として喜びとやりがいを感じながら編集作業を進めています。

本学会誌は、年度中2回(9月末と3月末)発刊されています。投稿原稿の受付は、毎年度9月末に発刊される第1号への掲載文は3月31日(消印有効)、毎年度3月末に発刊される第2号への掲載文は9月30日(消印有効)となっています。

第22巻第2号(2018年9月末に発刊予定)への掲載を希望されている会員の皆様は、2018年3月31日が投稿期限ですので、ご準備ください。なお、3月末まで待たずに早めに投稿いただけますと、査読や修正に十分な時間がとれ、受理・掲載がスムーズに進みます。編集委員会では、よりよい論文となるよう査読と修正を繰り返す場合がありますので、会員の皆様にはご理解をいただき、ご協力をお願い致します。

ここ数年、学校現場の実践に即した論文、実践と理論との往還に関わる論文が期待されています。投稿規程もそれを受けて今年度改正され、論文の掲載順序が変更されました。どうぞ今年度の第25回学術集会(石川県金沢市)で発表された研究、また来年度の第26回学術集会(兵庫県赤穂市)で発表される研究を論文としてまとめ、投稿いただくこともご検討ください。なお、査読と修正に大幅な時間を要する場合は、次号に持ち越しになる場合がありますので、ご承知おきください。

投稿される際には、投稿規程および投稿原稿執筆要領(第21巻第1号 pp.76-82)をお読みいただき、十分に推敲した原稿をご投稿ください。また、投稿時のチェックリスト(同 p.83)をご使用いただくことで、確認ができるようになっていきます。

学会誌は学会の顔になります。実践と理論の往還に関わる皆様の地道な取り組みを結集した刊行物です。論文投稿を心からお待ちしております。

<編集委員会事務局>

〒310-8512 水戸市文京2丁目1番1号

茨城大学教育学部教育保健教室

斉藤ふくみ

TEL/FAX 029-228-8298 (研究室直通)

e-mail: fukumi.saito.naru@vc.ibaraki.ac.jp

事務局より

圓岡 和子 (事務局長)

◎会費納入のお願い

年会費の未納の方に、振込用紙を同封しましたので、早めに入金をお願いします。年会費が2年分滞った場合、学会誌の発送を一旦見合わせております。また、退会届が出されても、滞納分の会費は全額お支払いいただくこととなりますので、ご留意ください。

◎住所変更等の届について

来年3月下旬に学会誌第21巻第2号をお届けします。例年、大学院生や大学生の方で新たに就職し転居された方の学会誌が宛先不明となって返送されてきます。所属先や自宅住所、発送先が変更になった場合は、速やかに事務局までご連絡ください。その際、学会誌巻末の「会員登録」変更届をご利用のうえ、FAXもしくは、同様の内容をEメールにてお送りください。

編集後記

平成27年6月発行の第67号のハーモニーから今号まで3年間編集を担当させていただきました。それまでは特別企画として「東日本大震災の経験を通して一被災地の今」と題して、東日本大震災を経験された先生方から被災地の状況を報告していただいていた。3年前にその思いを引き継ぎ、継続的な支援のためにも、新シリーズとして「災害を考える」として、震災だけではなく、色々な災害についてそれぞれの立場で報告していただく新企画を作りました。

3年の間にも、熊本地震や各地での土砂災害など様々な災害が起きています。今号は私自身の大学の取り組みを報告させていただくことができました。会員の先生方も、様々な取り組みをされていると思います。ぜひともその取り組みをご紹介ください。今後もこの企画が続くことを祈っております。

今年も残り少なくなりました。来年も会員の皆様にとって健康・安全な良い1年でありますように願います。

(N. O)